

4つのシューマンとブラームスのソナタのツアーを終え、残る2つのソナタと共に、エリックと私のわくわくする旅は続いています。今回のプログラムは、美しい「ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第1番 op.78」、偉大な「シューマン：ヴァイオリン・ソナタ第2番 op.121」、A.ディートリヒ、ブラームス、シューマンが共同で作曲し、彼らの親しい友人で伝説のヴァイオリニスト、J.ヨアヒムへの贈り物でもある最も興味深い「F.A.E ソナタ」、そして素敵なクララ・シューマンの「3つのロマンス」。

シューマンとブラームスのソナタの世界を深く掘り下げることは、以前から私が試みたいと思っていた挑戦でした。それは彼らの室内楽や交響曲作品への視野を広げるためでもあったのです。そして予想通り、この2人の天才が人生と音楽を通してお互いに抱いた愛と尊敬や友情の結びつき、その感情や生き方についてより多くの理解をもたらしてくれました。

このブラームス、シューマンチクルスのプロジェクトを、長年の友人であり音楽仲間でもあるエリック・ル・サーージュと一緒に演奏することは、光栄であり、大きな喜びです。

榎本大進



今回のシューマン&ブラームスチクルス vol.2 では、互いにかけて離れた二人の作品群でもひとときわ輝く星のような二曲が核となっています。いわば太陽が二つある太陽系を探検していくような仕掛けです。目が眩むほど鮮烈な二曲のうち、一曲目「ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第1番 op.78」は全三楽章が静謐な力強さに貫かれ、抒情、平穩、憂愁という構成と、ただ聞き惚れてしまう旋律と永劫に通じる表現がきわだちます。二曲目「シューマン：ヴァイオリン・ソナタ第2番 op.121」は、超新星爆発の後の中性子星のように、矛盾する極端なエネルギーに満ちています。変化に富んだ風景、沸き立つエネルギーが全四楽章を生き生きとしたものにし、あちこちにちりばめられた気品に満ちた詩情が印象的です。

頂上となる二曲にふさわしい二つの衛星として、ヨアヒム、ブラームス、シューマンの友情の証として書かれた「F.A.E ソナタ」と、クララ・シューマンの作品のなかでも特に心を揺り動かす「3つのロマンス」をお贈りします。

こうして再び大進と共演できること、盟友として、ブラームスとヨアヒム、ロベルトとクララ・シューマンの友情と愛と尊敬という旗印のもと演奏することは計り知れない喜びです。

エリック・ル・サーージュ

